

# 現代英米演劇の研究

日比野 啓

2016年度刊行された現代英米演劇に関する書籍・論文の数は評者が本欄を担当するようになって以来もっとも多かった。そこで前置きは省き、紹介と短評に徹したい。

前回の範囲だが、紹介し損ねたのでまず日本アメリカ演劇学会『アメリカ演劇 27—21世紀アメリカ演劇特集』（2016年3月）から、藤田淳志『『オーガスト——オセージ・カウンティ』に見る家族崩壊の再演——現代アメリカの家族と家族劇』が面白かった。何かの批評理論を参照枠にし、作品の筋立てがいかにその理論と整合性があるかを縷々述べるだけで、粗筋を述べるのと大差ないものが論文として通用することもまだ多い日本の演劇研究だが、藤田は自らの議論を自分で一から組み立てている。『オーガスト——オセージ・カウンティ』が家族劇の正典とされる作品を多くパロディとして引きながら、家族を捨てる物語を描いたと評価し、演劇ではその本質的なメタシアトリカリティゆえ観客が距離を取ることができるが、映画は観客の没入を要求する、だからこの作品の映画化は失敗したのだと明快な説明を与える藤田論文は読んでいて小気味いい。他に川村亜樹、岡本太助、平川和、村上陽香による四篇があるが、これらは批評理論（ダイヤヤー、プラウ、サイド）を作品分析の軸に据えて、誰でも読み解ける物語を大仰に語り直しているだけで、やっていることは作品解題に過ぎない、という意識が抜け落ちているように見える。

内野儀『J演劇』の場所——トランスナショナルな移動性へ』（東京大学出版会、2016年6月）の第I部は「現代アメリカ演劇研究の地平——モダン・ドラマとパフォーマンス」と題されてオニールからジョン・ジェスラン、ビルダーズ・アソシエーションまで幅広い作家や集団を論じている。同時代パフォーマンスを併走者として愛情深く観察する内野と、モダン・ドラマの研究動向を手際よく、しかし距離を置いて整理し、「分厚い記述」を避けて、今後の研究の可能性について見取り図だけを示してみせる内野は同一人物には思えず、その意味で研究者としての内野の間口の広さをあらためて思い知らされる。だからこそ（言及した「二〇世紀を定義した二五作品」のリストにも九作品が挙げられている）ミュージカルに一言も触れずに二〇世紀アメリカ演劇を語る、という筆者の構えに無理を感じてしまう。演劇研究が文学研究・文化研究から離れて自立するために身体やパフォーマンスをテキストと対立させて論じてきたことをウォーゼンにならって脱構築するよりも、演劇史において本来「メインストリーム」だった歌舞劇・音楽劇や大衆芸能を論じるほうが実りがあるのではないか。

なるほど、日本におけるその方面の研究は合衆国やイギリスに比べると寂しい限り

## 回顧と展望

だが、それでもいくつか例はある。竹谷悦子「スウィングする帝国——ブラック・パシフィックと第二次大戦前夜の『ミカド』」(『帝国と文化——シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで』[春風社、2016年9月]所収)は英語単著の一部を自身で翻訳したもので厳密には初出ではないものの、日本語で再読するとギルバート&サリヴァン『ミカド』が環大西洋における相互文化交渉で変容していくダイナミズムを生き生きと描き出すその筆致に唸らされる。手前味噌になるが、日比野啓「近代化された情動——カルメン・ミランダとレヴューの終焉」(下河辺美知子編『モンロー・ドクトリンの半球分割——トランスナショナル時代の地政学』[彩流社、2016年6月]所収)は、大劇場レヴューの衰退を当時の文化状況と結びつけて論じ、前年に発表した「アメリカ合衆国のレヴュー」(『ステージ・ショーの時代』[森話社、2015年11月]所収)同様、レヴューの歴史を歴史化したものだ。

また、同書に収録された常山菜穂子「不確かな半球——世紀転換期ハワイにおける日本人劇場建設とモンロー・ドクトリン」は、ハワイ移民一世たちによる日本人演劇を考察したもので、環太平洋における文化交渉史のなかで一国史演劇の境界が曖昧になるさまを記述する、演劇史における新しい潮流に沿ったものだ。『帝国と文化』に収録されている一谷智子「核と帝国主義——オーストラリア先住民演劇『ナパジ・ナパジ』」も同様の試みといえるが、作品解題の域を出ていないのが惜しまれる。

『帝国と文化』には他にも興味深い論考が二篇収録されている。ティム・バリンジャー、長谷部寿女士訳「帝国における音のスペクタクル——聴覚と視覚のネクサス、デリーとロンドン、1911-12年」は英文論集からの翻訳で、ロンドン・コロシアム・ミュージック・ホールで上演された『インドの王冠——帝国仮面劇』(1912年3月)をめぐる帝国の表象を扱っていて近年のこの分野における研究の進展を示すものだ。堀真理子「〈帝国〉の時代を生きる——アントニオ・ネグリと「マルチチュード」の演劇」はネグリがイタリア語で書き、フランス語翻訳として出版し、のち英語に翻訳されて刊行された戯曲『抵抗三部作』を論じ「マルチチュードの視点からの二世紀演劇」を考えるにあたってキューバ系英国人劇作家デビー・タッカー・グリーン『真相と和解』や日系アメリカ人ヴェリナ・ハス・ヒューストンのダンスオペラ『イーピゲネアの直観』を引用するなど、台詞劇と音楽劇・歌舞劇のジャンルの区別、あるいは「英語圏演劇」という設定すら超えて「演劇」なるものを時代の文化状況と結びつける新たな試みを示している。

同様の意味では、森本光「Poeの黒い道化芝居——“Never Bet the Devil Your Head”と minstrel・ショウ」(『アメリカ文学研究』第53号)は、当時の大衆芸能にポーの想像力の源泉を探っており、文学と演劇の相互交流・影響関係を見る別の新しい流れを示している。ただし、主人公の顔が打たれて黒く変わるというだけで minstrel・ショウに結びつけるのは牽強附会だし、extravaganzaが「minstrel・

## 現代英米演劇の研究

ショウにおける演劇の形態を指して」いるというのは単純に誤りである。ミンストレル・ショウに関する引用文献二冊のうち最新のものが1974年出版のロバート・トールの著作であるのは、基本的定義を引くだけだから許されるとはいえ、この分野での基本書であるロバート・ルイスの*From Traveling Show to Vaudeville*を読んでおけば、19世紀中葉合衆国の大衆芸能の多様さについて理解でき、ポーの想像力がこれらの芸能総体と接続される可能性について説得力のある議論が展開されただろう。

糸多郁子「*The Widowing of Mrs. Holroyd*とナショナリズム——家庭劇に潜む移民問題」（『桜美林論考 人文研究』第8号）や、河野賢司「エマ・ドナヒューの演劇作品」（『九州産業大学国際文化学部紀要』第65号）も、森本同様、小説家として評価されてきた作家たちの演劇作品を取り上げて論じている。糸多論文は『ホルロイド夫人やもめになる』における「当時のナショナリスティックな思考のありかた」と「その思考の限界」を見出し、左右どちらともつかぬ、政治的鶴としてのD. H. ロレンス像を提示し興味深いものの、従来のテキスト研究とそう変わらない。河野論文は粗筋の紹介でしかない。

もっとも一昨年来強調してきたように、文学研究そして人文学全般についての世間の無理解・無関心という現状にあって、「素朴な」テキスト研究あるいは作品解題は初学者のために絶対に必要だ、という評者の意見は変わらない。近年の「高い」研究水準からは離れたところで文学研究の裾野を広げる（そして間違っても自分たちがやっていることが卓越したものだとか誇らない）論文・書籍には深い敬意を払うものである。今期アイルランド演劇はそのような良書二冊の刊行を見た。前波清一『現代アイルランド演劇入門——「現実と喜び」のドラマ』（彩流社、2016年9月）と木村正俊編『文学都市ダブリン——ゆかりの文学者たち』（春風社、2017年2月）である。前者は第一部でイェイツ『煉獄』からマクギネス『ソム川に向かって行進するアルスターの息子たちをご照覧あれ』までの「現代アイルランド演劇の名作一〇選」が紹介され、第二部で「ナショナリズムと北アイルランド」「歴史と宗教」というような「現代アイルランド演劇の特性一〇項」という題名でテーマに沿った作品が選ばれる。学部生が卒論などでアイルランド演劇を論じるにはこれだけ知っていればまず十分だろうという論点が漏れなく言及され、入門書として申し分ない。

後者は演劇だけではないが、岩田美喜「レイディ・グレゴリー：舞台上で語り継ぐアイルランドの歴史——ナショナリズムと口承文学」他全七篇の論文が収録され、岩田のほか森川寿、佐藤容子、木村正俊、坂内太、堀真理子、三神弘子が執筆を担当している。堀の「サミュエル・ベケット：どこにもない故郷への旅——死者たちとの出会い」のように、ベケットの記憶の中のアイルランドを辿るために数多くの作品を引いた結果初学者にはとっつきにくいものになっているものもあるが、多くは作家の自伝的要素と絡ませて「代表作」を二、三取り上げ論じる、馴染みのある形式のもので、前

## 回顧と展望

波書とあわせてアイルランド演劇への興味や関心を学部生に持たせるにはもってこいのものとなっている。

堀論文が初学者にとって「不親切」なのは、ベケット研究の最先端を担う一人として、さらりと書くわけにいかない、という思いが堀にあったからかもしれない。井上善幸・近藤耕人編著『サミュエル・ベケットと批評の遠近法』（未知谷、2016年11月）は、バタイユ、プランシヨ、ドゥルーズ／ガタリ、あるいは当代きつてのベケット研究者ジェイムズ・ノウルソンなどの論考の翻訳とともに、堀真理子「『ゴドーを待ちながら』にみるベケットの戦争体験」ほか日本人研究者の論文全八篇が収録された大部のもので、堀のほか井上善幸、対馬美千子、田尻芳樹、近藤耕人、西村和泉、森尚也、岡室美奈子が執筆している。ベケットについてこれだけ多彩なアプローチがなされてきており、それらが一冊にまとめられていることには驚嘆するものの、学部生や一般読者が抵抗なく読むためには多くの予備知識を必要とする本書を読んでいくと、日本における人文学的教養の衰退という事態に著者たちはどう応接するのだろうかという問いを抱かざるを得ない。ベケットを専攻する大学院生にとっての必携リーダーにはなるが、一つの主題に従ってまとめられた論集でもなく、一人の思考を深く掘り下げていく単著でもない、単一の作家の名前のもとに雑多な論考が並ぶというリーダーという形式が、現在の日本の英米文学研究でどこまで必要とされているだろうか。

大貫隆史「『わたしのソーシャリズム』へ——二〇世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ』（研究社、2016年3月）もまた「とっつきにくい」書物ではあるが、単著であるゆえに丹念に繙いていけばその晦渋さの印象は次第に薄れる。大貫は本書でデヴィッド・ヘア『プレンティ』を分析して、そこにある理想的共同体の感覚が提示されていることをグレマスの四角形を用いて説得的に示しながら、そこから取りこぼされる〈残滓的〉経験をレイモンド・ウィリアムズのいう感情構造だと断定する。このような読みが実際の観客の体験にどのようなかたちで現れるのかを大貫は詳らかにしないが、しかし内野がウォーゼンを引きながら語る「新たなドラマ研究」の可能性はここにあるのかもしれないとも思う。

枚数の関係上触れられなかったが、他に『英米文学にみる検閲と発禁』（彩流社、2016年7月）には、門野泉「『チェス・ゲーム』上演禁止と劇場閉鎖」が収録されていた。また『九州英文学研究』第33号には石田由希「隠す、鳴らす、繋げる：サラ・ケインの『クレンズド』における拷問者の描出法」、『リーディング』第37号には小田島創志“Waiting for Mother: Harold Pinter's *The Homecoming* and *No Man's Land*”，『成蹊人文研究』第25号には真野貴世子「表層にとどまる——*And Tell Sad Stories of the Deaths of Queens...*における身体表象」が掲載されていた。それ以外にも見落としがあったかもしれない。読者諸兄姉のご海容を乞うとともに、ご教示いただければ幸いである。

（成蹊大学教授）